

「市場」のアナザー・ストーリー

「市場」という表記を「シジョウ」と読める人は、多かれ少なかれ経済学的な思考の枠組(フィルター)をとおして議論に関わっているのであろう。何の「フィルター」も付けず「曇りなき眼」で見つめることができるのであれば確かにハッピーなことではあるが、経済学に関われば関わるほどこれは困難である。近いはずの「いちば」は遠く、そこに通じる門は狭い。また、レーテ市の門は、心を留めつつ「忘却」する稀有の能力を要求している。

アダム・スミスによって提示されたとされる「市場経済」のビジョンは、どの経済学にとっても最重要である。「利己心(self interest)」に基づく個々の局所・分散・同時並列的な行為の結果が、「驚くべきことに」必ずしも無秩序ではなく調和し、かつ「公益(より高い効率、収益性など)」を実現し得ること。スミス自身がこれを十全に「証明」し得たか否かは疑問があるが、ビジョンを示したこと自体が大切である。なお、スミスと同様な議論を提示した先行者のマンデビルは、「蜂の寓話」の中で「私悪は公益である」としたが、「私悪」という表現が物議を呼び、余計な論争と弁明を余儀なくされた。賢明なスミスはこの事態を避けたものである。

現在において、「市場経済」を、「価格調整メカニズム」として体系的に描き得ている枠組は「一般均衡理論」である。ローザンヌのレオン・ワルラスが創始した理論体系であるが、価格によって導かれる「純粋な」市場経済に、全ての財・サービスについて需要と供給を同時に一致(均衡)させる「均衡相対価格体系」が存在することを主張するものである。先述したアダム・スミスの主張の前半(個々人の決定相互が整合すること)と対応する。価格を変数とした需要関数、供給関数が

らなる方程式体系として構成するが、ワルラス自身は数学ができないので、「均衡価格」の存在を、変数の個数と方程式の個数との一致で説明するという「稚拙な」方法をとっている。その後の「一般均衡理論」の後継者たちは数学的(関数解析学、測度論、ゲーム論など)なエレガントさを極め、「均衡価格」の存在を「不動点定理」(コンパクト集合(有界閉集合)上に定義された自身への連続写像(または連続対応)には不動点が存在する)により証明している。なお、「不動点定理」は、スピノザが「神の存在証明」で用いたロジックと同型である、という説もある。

スミスの説の後半の「公益性」に関連する話題には、「パレート最適」(又はパレート効率)がある。どの参加者個人についても、他の人の状態を悪化させない条件下に、それ以上当該個人の状態を改善(パレート改善)しえない状態であるが、「一般均衡状態」がこの「パレート最適」(の一つ)である、すなわち市場メカニズムは、「完全情報」(各人とも平等に、必要な情報を全て利用し得る)や「完全競争」(官民間わず余計な制約はない。だれも価格などの支配力を持たない)といった純粋な条件下では、各個人の私益(満足、利潤の最適)のみならず、全体の「効率性」としての公益性を実現し得る(分配の公平は保証しない)、という説である。

ワルラス自身は苦戦の上、「均衡価格」の存在を一応証明したが、さらに悩みがある。「どうやって『均衡』を実現するのか?」。彼は次の方法を提示する。(1)実際の市場での取引により実現する、(2)需給を一致させる「セリ人」を登場させる、である。(1)は理論に値しないゆえに(2)が重要である。いわゆる「予備的模索過程(タヌマン)」

であり、次のアルゴリズムにのっとって事は進む。

①セリ人が適当な価格を叫ぶ(call)、②参加者は提示された価格を前提(価格は与件ということ)に自身の利益(効用・利潤)のみを考慮した最適な需要量、供給量をセリ人に申告する、③セリ人は各人からの申告をもとに各財・サービスの需要量、供給量を集計し、需要が超過しているものはより高い価格、逆ならばより低い価格を再度提示する、④この過程を全ての需給が一致するまで繰り返す(すなわち需給不一致の状態での勝手な取引は「禁止」(いわば市場を機能させる基盤としての「規制」)。

ところが、これを現代版の市場均衡論における「完全情報」や「完全競争」の前提と照らし合わせると、困惑してしまう。

①抽象的な「市場」を「主体」の行動のレベルに具体化したことにより、解決した問題と新たに生じた問題。「価格与件」ならば、価格を決定する者がいなくなるが、この役割を「セリ人」が担ってくれる。しかし、「セリ人」という「私益(効用・利潤)」追求の行動原理を取らない「理解不能な、マイクロ不合理な」主体が現れてしまった。

②「完全情報」の面では、このシステムが機能する「極限」の姿として、各人は自分自身と価格情報以外は不要である。他方、セリ人も各人から申告される需要・供給量の情報以外は不要であるが、数量情報に限っては全ての者から中央集権的・独占的に得る権限がある。必要な情報についての構造は各人とセリ人間では「非対称、偏在」である。

③「完全競争」の面では、各主体は「私益」計算さえしておれば足り、「競争」の余地がない。需給調整はセリ人の専権事項である。そもそも均衡に達してセリ人がGOサインを出さない限り取引ができないし、均衡に達すれば、各主体は決まったことを粛々と実施するのみである。

しかし、以上の姿のどこが分権的市場経済のモデルなのか?。逆説的に、集権的経済を描写してしまっている。

なお、不均衡下の取引を認める「理論の規制

緩和」をしたらよいではないか、との声も出そうであるが、「均衡理論」が形成した資産を失うことが怖い(と経済学者は感じる。師匠からも代々そう教えられる)。「不均衡動学」の門前に立ちすくむ。

また、マイクロ経済学とマクロ経済学の違いはあるが、「合理的期待論」からワルラスのセリ人論をみても、クモの巣的な調整をするセリ人やマイクロ主体の「愚かさ」が許せないことだろう。かつて偉大な大統領が言ったように、自由で民主的な社会では「1人の人を騙すことは可能でも、全員を騙し続けることはできない」(はず)とすれば、「人々」の期待は平均的に実現する(はず)であり、それゆえ主体は経済構造(パラメータ)についての正確な情報を持っている(はず)と想定される。セリ人はこの想定と不整合をきたす。なお、「合理的期待論」は、実際には表向きの「期待形成の仕方についての理論」を超えて、「期待が実現」するよう、モデル上、市場の動き方に言外の制約を同時にかけているに等しい。自立的主体たるロビンソン・クルーソー1人しかいない(よって競争も協調もない)、ニート風の世界において、彼が内的整合性を取れる程度に精神が「合理的」で、自然(フライデーを含む)も確率分布を安定的に描ける程度(行儀のよいリスク:ホワイト・ノイズ)に優しい幸せな状態といえるが、ここに社会も市場もない。

我々はどうもアダム・スミスがせつかく提示してくれた「市場経済」のビジョンを未だうまく汲み取れていないようである。「市場メカニズム」が有効に機能するための実装方法はどうか、この四半世紀を「規制緩和」で徒勞し、いま、さらに四半世紀を「何でも規制緩和」の調整期として失なわないためには、もっと真摯に「市場」を理解し、諸規制など市場の基盤制度を設計すべきだろう。アダム・スミスは「神の見えざる手」と表現したが、この点だけは彼に反して神話でも信仰でもなく、不遜にも「いちば」の成り立ちを真面目に「見えざる手を見る」しかなかり。市場は大切である。(常世波)